暗黒年代記　魔に支配された世界の物語　四

……それは、嵐の到来を予感させる出来事であったかもしれない。
「選ばれし三匹」の一匹にして、オーガ族の勇将であるグルドが投獄された――その一報が電光石火の勢いで駆け巡った時、バケモノ社会にかつてない戦慄がほとばしった。
きっかけは先日、グルドが同僚のトゥトゥグアと共に、同格者のターニャが支配する「黒い家」を視察に訪れた時のことだった。この時、グルドが突然、凶行に及び、ターニャの研究成果である試作体・クリスタベラを殺害したのである。
この行為に、ターニャは最初は驚き、次いで激怒した。
「なんてことをしてくれたの、グルドッ！　あなた、あたしがコレを作るために、どれだけ苦労したと思っているのッ！」
人間の新たな繁殖方法を模索するにあたり、ターニャはこれまで幾度となく実験を繰り返し、ようやく「乳房出産」という成果を確立したところだった。すでに改良技術は確立済みで、収集した実験データも残されているとはいえ、この「乳房出産」にはいまだ不確定な要素が少なからずある。そのため、万が一、量産体制に移行した後に不足の事態が生じた場合、成功した個体をじっくりと丹念に調べ上げ、より技術の制度を向上させる際に使うつもりであった。そうでなかったとしても、生体標本として不老処置を施し、永遠に生かし続け、コレクションも兼ねてずっと飾っておくつもりであった。それが、グルドの愚行によって一瞬にして無にされてしまった。ターニャのグルドに対する怒りは当然といえるだろう。
一方、グルドである。彼はこの愚行の後、ハッと我に返り、ターニャに対して謝罪の言葉を口にした。
「すまない、ターニャ……。自分でも、なぜこんなことをしてしまったのか……謝って許される問題ではないが、とにかく、申し訳ないことをした」

謝罪の言葉を口にしながら、グルドは考えずにはいられなかった。人間は自分たちバケモノにとっての敵であり、その辺にいる虫ケラ以下の存在でしかない。そのことは、頭ではわかっている。わかっているのだ。だが、クリスタベラの「殺してくれ……」という蚊の鳴くような弱々しい懇願を耳にした時、その願いを叶えてやることこそが、いまの彼女にとっては最良の助けになると思ってしまったのだ。

「本当に、すまない……」

自分でも、なぜこのような愚行をしてしまったのかわからない。もはや謝って済む問題ではないが、それでもグルドは謝るしかないと思い、自分よりも遥かに小さな相手に対して頭を下げた。

しかし、ターニャは許さなかった。怒り狂った彼女は、そのままの勢いで部下たちを呼びつけると、集まったゴブリンやコボルトの兵たちに向かって、グルドを指さしながら命じたのである。

「こやつを捕ませよ！　そして殺せ！　この大罪人を始末しなさい！」

「エ、エ……」

命令を下された部下たちは驚いた。グルドといえば、自分たちの上司であるターニャと同じ「選ばれし三匹」の内の一匹であり、バケモノ社会では知らぬ者のない最上位に位置する存在である。それだけでなく、その強さと勇猛ぶりたるや、バケモノの中でも最強と言われており、ドラゴンや巨人よりも強いと噂されていた。そんな者を捕まえ、殺すなど、彼らは自分たちにできるとは思えず、実行を躊躇わずにはいられなかった。

だが、彼ら以上にターニャの命令に驚いたのがトゥトゥグアであった。当初、彼はターニャの怒りに賛同的であり、またグルドの愚行に怒りを覚えていたこともなって、事態の成り行きを見守ることにしていたのだが、事態が予想外の方向に急転した後は、態度を一転させてグルドの肩を持つようになった。

「待て、まてまてターニャ、落ち着け。そなたの怒りはわかるが、いまの命令はやりすぎだ。取り消した方がいい」

「なによトゥトゥグア、あなたもグルドの味方をするというの！」
「い、いや、そうじゃない。心情的には君の味方だが、仲間割れはよくない。他の者の目もあることだし、一旦落ち着いてほしいだけだ。少し落ち着いて冷静になれば、妙案や良案も浮かぶというものだ。だからいまはとにかく落ち着いてくれ、頼む」
トゥトゥグアは、ターニャをなだめ、すかし、とにかく落ち着くよう説得を続けながら、グルドの愚行を非難するその一方で、彼が連日の勤務で疲れていたと嘘の言葉を並び立てながら、この償いはいずれ必ずさせるから今回は許してやってほしい、と訴えたのだ。
バケモノ社会の均衡を誰よりも重んじるトゥトゥグアとしては、事態をこれ以上悪化させないため、とにかく、ターニャの怒りを静めるため、ありとあらゆる言葉を尽くして説得にあたったのだが、ターニャはグルドを許さなかった。
彼女はしきりにグルドの罪業を糾弾し、死をもって償えと叫びたてたのである。そして、それにグルドが応じかけたため、どうにもならなくなったトゥトゥグアは、ついに伝家の宝刀を持ち出すことにした。
「な、ならば……この一件は、我らが「指導者」様に委ねてみてはどうだろうか？」
バケモノたちにとって「指導者」という存在は、「神」にも等しい存在である。ゆえに、その名前を持ち出されたとあっては、たとえターニャとしても従う他はなかった。
ターニャはしぶしぶながらもその考えに応じたが、怒りが収まらない彼女は、裁定が下されるまでの間、グルドを牢屋へ入れておくことを要求し、これをグルドが承諾したため、この場はどうにか収まった。
一連の騒動の後、グルドは、トゥトゥグアに伴われ、彼が拠点を置く旧ゼリカ帝国の帝都アルファスへと連行された。そして、トゥトゥグアが居城としているグーリア宮殿の地下深くに設けられた牢屋へと連れて行かれたのであった。

牢屋に入れられた後、グルドはトウトゥグアに向かって深々と頭を下げた。
「すまない、トウトゥグア。本当に迷惑をかけた」
トウトゥグアは、疲れたような笑みを浮かべてその言葉に応じた。
「まったくだ。だが、もう済んだことだ。後のことは上手くやっておくから、おまえはそこで少し頭を冷やしていろ」
「……本当に、すまない」
「気にするな。ただ――」
「ただ？」
「この後のことを考えると、少し気が重いよ」
トウトゥグアの予感は的中した。
グルド投獄――という一報を受け、まず、オーガ族に激震が走った。一連の騒動に関して、表面的なことすら知らない彼らは、自分たちの英雄がまるで罪人のごとき扱いを受けたことに激怒して、投獄されているグルドを力づくで救出すべく、兵を集め、装備を整えて、準戦闘態勢に突入した。
これを受け、いまやオーガ族全体をグルドと同一視するようになっていたターニャも動いた。彼女は配下のゴブリン族とコボルト族に動員をかけると、兵器生物を投入する準備に取り掛かった。この兵器生物というのは、先の大戦では実戦への投入が間に合わずに使われなかった超兵器で、ドラゴン族や巨人族よりも強い戦闘力を有する人造生物のことである。この兵器生物は、一匹で人間の兵二千人に匹敵する強さがあり、もしこれが同胞であるオーガ族に向けられたとしたら、バケモノ社会の団結は千切と乱れ、大混乱に陥り、取り返しのつかない事態を招く結果になっていただろう。
しかし、この衝突は未然に防がれた。トウトゥグアが両陣営を奔走して互いに矛を収めるよう説得し、また、グルドからも、牢獄から一族に向けて軽率な行動を控えるよう直筆の文書が届くと、双方は不平不満を鳴らしながらも矛を収めたのであった。
だが、この一件は、バケモノ社会に目に見えぬ亀裂を生じさせることに繋がった。それはまだ微細ながらも、致命傷へと深刻化しかねない傷だった。

そして、この隙に乗じて、もはや絶滅間際まで追い込まれていた人間たちが、にわかに勢いづいたのであった・・・・・・。

続きは本編にてお楽しみください。